歴史散策パンフレット

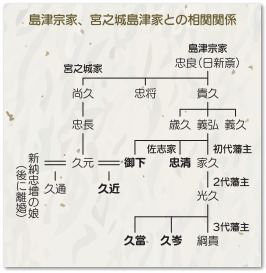
～ 佐志麓周辺 ～

昔の面影を今に伝える石垣

興詮寺に伝わる位牌

佐志島津家

島津義弘の末娘御下が、江戸での人質生活の行賞（化粧料）として、佐志の地三千石を与えられたことに由来。ただし、女性が当主になることはできなかったため、兄の忠清を初代、子の久近を2代とし、その後、養子に迎えた薩主光久の子久岑（3代当主）、久當（4代当主）が跡を継ぎました。正徳2年（1712）、4代久當のときに一所持の家格とされ、明治2年に11代久容が領地を返上（版籍奉還）するまで、佐志郷の領主としてこの地を治めました。



※『宮之城町史』参考　　|：実子　＝：婚姻関係　||：養子　を表す

❶ 佐志郷御仮屋跡　ここからスタート

現在の佐志小学校や佐志交流館（佐志中学校跡）がある場所は、江戸時代、佐志の地を治めた佐志島津家の御仮屋があった場所です。御仮屋には役所や領主館が置かれ、これを取り巻くように武士の集落（麓）が形成されていました。周辺には仮屋瀬、仮屋原という集落があり、今も地名にその名が残っています。

現在の御仮屋跡（正面左奥が小学校、右が交流館）

佐志小学校・佐志中学校

佐志小学校は、明治４年（1871）の郷校創設に始まり、現在に至ります。

佐志中学校は、学制改革により昭和22年（1947）に創設。現在の佐志交流館の場所にありましたが、45年に閉校し、宮之城中学校に統合されました。

佐志中学校跡 記念碑

❷ 興詮寺（本堂）内陣　佐志郷御仮屋跡より徒歩２分

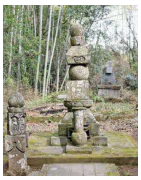
永仁５年（1297）に祁答院渋谷氏４代行重が、父を弔い、子孫繁栄を願って建てた天台宗（後に真言宗）の松尾寺に由来。応永５年（1398）に現在の地に移り、松尾山興全寺と改めました。明治初めの廃仏毀釈で多くの寺院が壊された中、幸いにも難を免れました。これは御下様の位牌堂であったためといわれ、現在も御下様ほか２名の戒名が刻まれた位牌が伝わっています。その後は浄土真宗のお寺となり、興詮寺と改めて現在に至ります。

本堂内陣には禅宗寺院の建築様式が残っていて、その特徴から15世紀後半のものと推定されています。鹿児島県内で中世までさかのぼれる貴重な寺院建築として、平成12年（2000）に県指定文化財に指定されました。

本堂内陣

今も残る禅宗寺院の様式（左：組物・大瓶束　右：木鼻）

❸ 興全寺墓地（御下様の墓）　興詮寺より徒歩１分


御下様の墓

御下（幼名：千鶴）は、義弘が50歳のときに生まれた子供であったため、それはたいそう可愛がられたそうです。

はじめ、島津家の家臣伊集院忠真の妻となりますが、後に夫は、兄家久によって殺害されてしまいました。

その後、娘とともに江戸での人質生活を送ることとなり、帰国後は宮之城島津家３代当主久元の妻となりました。このとき久元には妻子がいましたが、薩主家久の命令で離婚させられています。その後２人の間には男子（久近）が生まれますが、15歳の若さで死去。夫久元にも先立たれた御下様は、慶安２年（1649）にこくなりました。

久元は宮之城島津家の菩提寺である京切寺に、御下は自身の領地である佐志の興全寺に葬られました。興全寺墓地に残る御下の墓（五輪塔）は、平成３年に町指定文化財に指定されています。

❹ 歳久の供養塔とあんだどん　興詮寺墓地より徒歩 10 分

渋谷氏に代わって祁答院地方（現在のさつま町と薩摩川内市の一部）を治めた島津歳久は、領民からとても慕われていたそうです。歳久の死後は、県内各地に歳久を祀った神社や供養塔が、数多く造られました。

広瀬の供養塔は、梵字と歳久の戒名「心岳良空大禅伯」が彫られた大きな五輪塔で、その下には“あんだどん”と呼ばれる小さな祠（阿弥陀堂）があります。『三国名勝図会（※1）』には、阿弥陀堂の額口（※2）に「奉寄進 薩州祁答院 石阿弥陀如来 天正十七年（1589）、文月吉日、願主藤原之歳久」と記されていたとあり、歳久ゆかりの阿弥陀堂であることが分かります。

歳久の供養塔　　歳久の供養塔（左）とあんだどん（右）　　阿弥陀仏

※1　天保 14 年（1843）に薩摩藩が編さんした文書で、領内の地誌や名所、特に神社や寺院の由緒について詳しく紹介されています。

※2　神社や寺院の堂前につるして鳴らされた仏具の一種

❺ 佐志切開殿の供養塔群　歳久の供養塔より徒歩 15 分

前目集落にある石塔群で、江戸時代に書かれた古文書『祁答院記』には「佐志の領主の墓と伝わるが、至徳年間（1384年－1386年）に建てられた供養塔と考えられる」と書かれています。「切開殿」とも呼ばれ、昭和45年に町指定文化財に指定されています。

❻ 佐志駅跡　佐志切開殿より徒歩 10 分

旧国鉄宮之城線の駅の一つで、跡地にはホームの石垣と車輪が残されています。宮之城線は、大正13年（1924）に川内－樋脇間、２年後には樋脇－宮之城間が開通。その後も鶴田、永野、大口までと延長し、昭和12年（1937）の全線開通時には、川内－大口間は総延長66.1ｋｍに及び、物資の輸送や移動手段として多くの利用がありました。しかし、バスや自家用車の普及によって次第に利用者は減少し、昭和61年１月９日、惜しまれながらもその歴史に幕を閉じました。

佐志駅跡

佐志駅跡に残る車輪と記念碑

❼ 阿字賀神社　佐志駅跡より徒歩 10 分

はじめ「阿字賀大明神」といい、明治時代の社格制定により、郷社「阿字賀神社」と改称。創建時期や詳細は不明ですが、祭礼については『宮之城記（※1）』に、湯田八幡の神様が９月25日の「神輿浜下り（※2）」に先立つ９月９日、ひそかに阿字賀大明神に出向し、そこで舞楽が披露されたことが書かれており、この祭を「しばさし」と呼んだそうです。

鳥居と周辺の石造物

現在鳥居の周りには、仁王像や馬頭観音、元文４年（1739）の年号が刻まれた石造物などが置かれています。長い石段を上った所に社殿があります。ここには「昭和16年12月８日　宣戦布告記念」と刻まれた燈籠があり、建立者とその家族の名前が刻まれています。これは太平洋戦争の勝利を祈願したもので、個人が戦勝祈願のために供えた燈籠として珍しいものです。

社殿

戦勝祈願の燈籠

※1　享保年間（1716-1735）に宮之城郷士士持政博（仙巌）によって書かれたもので、郷内の歴史と地誌が詳しく紹介されています。

※2　赤絹をかぶり、獅子の姿で頭を振って猛威を表す「怒猊」が先導し、厄をはらう祭事。怒猊はあっくい（悪食）どんとも呼ばれています。

❽ 豆漬の湧水　阿字賀神社より徒歩５分

「豆漬」という地名は、鹿児島県にもいくつか知られています。もともと湧水が豊富で、昔、おやし（芽の長い豆もやし）を作るために大豆を水に漬けていたところを意味するそうです。ここの湧水は飲料水としても使われています。

タンクから各家庭につながる多数のパイプ

❾ 戦没者慰霊碑　豆漬の湧水より徒歩３分

佐志小学校西側高台の「寺山」と呼ばれる場所にあり、階段を上った正面に３基の石碑が並んでいます。これらは旧佐志村から出兵して戦死した人の名が刻まれた慰霊碑で、戦争で多くの人が命を落としたことを今に伝えています。

正面左が「殉難列士の碑」（日清・日露戦争）、中央が「丁丑招魂碑」（西南戦争）、右側が「慰霊塔」（日中戦争・太平洋戦争）で、そこに記された戦没者数は以下のとおりです。

●西南戦争２０名　●日清・日露戦争３名
●日中戦争１１名　●太平洋戦争１１２名

製作：さつま町文化財ボランティアガイド「さつまガイド」，さつま町教育委員会
連絡先（事務局）：TEL 0996-53-1732　FAX 0996-53-0900